



題字 浜名一雄

岳連活動の問題点と対策について



理事長 石井謙一郎

岳連の活動も多様化し、数多い事業が執行されるようになった。しかし形の上では、各種事業を消化出来る能力として評価も出来るが、反面では運営上の問題とか、今後、岳連が指向すべき方向づけの問題となると、危懼される問題が山積みしているようだ。

まず組織問題では、岳連というものが、各団体の連盟体であるため、方向づけについても簡単に結論付けられない面を持っていると同時に、これを実際に運営するべき常任理事会の質と機能が最大の課題となってしまう。

それぞれ能力を持つ人達であるが、社会人故の制約を受けて、存分な活動が出来ない人も居り、思うように機能しないのが実情である。昨年はこの改善を計るべく、規約の改正を行ない、常任理事の実数を増すことで、お互いに補いあつて解決出来ることを期待した。

また行事の運営内容についても、技術中心の先鋭的な内容を好む人達と、初心者指導を要求する団体などとに分かれ、余力のない実情ではそれぞれの希望を満足させるころまではいっていないように

これについては、団体内における技術の特色 対象とする登山によって変る) によって捉え方が違うので、指導員会の教育方針や、遭対部の指導に、ついてきてもらうより他に方法がないと思う。

これらの考え方の根底は、現在の登山者達の意識の問題とも関係する事で、近代登山と云われるものが、宗教登山から近代アルピニズムへの脱皮、また最近の「スポーツ」としての位置付けなど、いまだ混乱の過程にあり、過渡期

の状態から抜けきっていないと、指導層の錯雑と消極的な面が見られるものと思う。これは全体的に云えることでもあり、登山に対する意識の相違は著しい。

その最たるものが、国体の点数制への移行に見られた評価の対立であつたろう。自然との対決に競技を見出すことでは、他にスキー、ヨット競技などが見られ、これらはハッキリとタイムで優劣が決まってしまうが、登山ではほんの一部の要素としか認められていない。

それをムリにも採点の対象にするのであるから、体系づけるのも大変な仕事だつたろう。これに対し、登山は自己と自然との葛藤の場であり、記録への挑戦だと主張する論者との対立は未

助に対する協力であり、団体などの大会に協力することもある。これらは本来、岳連が行なう事業ではなかったと思うが、岳連の運営能力の増加と社会的な地位とからくるもので、現在では義務づけられた形となり、公共性を性格づける大事な事業となつた。

運営の内容が多彩になるに従い、その負担は運営する委員にかぶるが、委員の能力の差や、協力可能な時間的余裕などに差がある。一部の委員に負担がかかっている。現在の様に多様化した内容と、高度化した行事の執行には、中途半端な気持ではとても荷が重く、続かないのが実情である。

これらの現象はすでに一部に見られ、運営上支障をきたしてきている。そこで皆さん方に大いに奮気して、より良い岳連を築き上げる努力をしてもらいたいと思ふものである。

第31回佐賀国体報告

阿久沢 廣

期日 十月二十四日～十月二十九日
場所 背振山系(蛤岳背振山・井原山・雷山・羽金山・十防山)
多良山系(経ヶ岳・多良山・帆柱岳)
若槻国体
スロー さわやかに、すこやかに、ガン おおらかに
参加者 監督 阿久沢廣(群馬登山会) 成年 茂木真太郎(群馬登山会) 関口賢(富山重工) 平形真二(中之条山系の会) 少年 木村文雄(伊勢崎工) 和久丸実(同上) 茂木国彦(浪高)

山岳競技会場の背振山系と多良山系は、標高三千米前後であるが、自然林を持ち美しい峡谷を秘めた、背振山系は悠々と波うつ山脈を連ね、多良山系は絶壁を屹立させ変化に富んだ特色のある山岳美をつくつている。大会競技コース

は両山系とも県境尾根の縦走を中心とした登り降り共五千m、水約平距離にして八十数kmでそれを四日間て歩くといった飯豊や朝日連峰の縦走に匹敵する体力的に困難なコースで行なわれた。

評価内容は五項目のうち体力が最重点(37点)について技術(25点)観察研究(15点)にウエイトを置き、以下装備13点、態度(10点)について審査された。体力は一日に30kmに近いロングコースでコース中には成年2回、少年1回の特別区間が設けられ、山岳マラソン(走つたら減点)的な体力測定が行なわれた。これが得点競技定が行なわれた。これが得点競技化されたならば、大きな事故に繋がるのではないかと云う非難の声もあつた。又この間では基礎体力が、自然林を持ち美しい峡谷を秘めた、背振山系は悠々と波うつ山脈を連ね、多良山系は絶壁を屹立させ変化に富んだ特色のある山岳美をつくつている。大会競技コース

なるのではないかと懸念した次第である。技術に於いては、基礎技術の体系で採点され、日頃の登山の持味を十分出し合つて良かったと評価された。生活技術に於いてはコンロの使用前後の点検、着火時間等の研究の不足が指摘された。装備ではザックの大きさに対して容量が80%でなければならぬことなど、自分の所持している装備を完全に使いこなす訓練と工夫がされているかどうかチェックされた。又テントについては防水に対する配慮と工夫が足りないといふ評で指摘された。観察研究では読図が2回と、テントのスペース、雲、地形、等高線の数での歩行時間等のペーパーテストが行われ、又当日歩いた概念図も筆記させられた。計画書及び記録、天気図の作成も評価された。態度についてはメンバーシップ、リーダーシップについても講評で指摘された。

第35回栃木国体から得点競技化される前提で今回の佐賀国体は、少年の部に於いては、関東アロツク予選をもうけ、今迄にない方法で選手選抜が行なわれた。本大会も昨年同様監督と選手との切り離しが行われはしたものの、途中で競技中の選手を激励でき、又、成年少年チームのテントに各一泊ずつして作戦会議が出来るといった配慮がされていた。これらについては、監督の立場ということに工夫が見うけられた。

今回のコースでは多良山系では有明湾、背振山系では玄海灘の展望(次ページ下段へ続く)

利根水源登山の先駆者

常任理事 川 辺 柳 一

(一)まえがき

利根水源については、昨年来より「群馬県」が実施している「奥利根地域学術調査」によって、その内容は新聞等で発表され、すでに御存知の人達も多いと思うが、群馬県に有りながら、国内でも数少ない自然環境が保存されている地域として貴重なものである。

尚この調査を計画した、環境保全課での主務者は、富山常任理事であり、調査隊長は、松井田山岳会の小林(常任理事)が当っており、岳連には関係深い行事である。

この地域は、深い溪谷が数多い滝によって構成され、特に左岸の各支流水源地域は、地層とお花苗によってすばらしい景観を保っている。

しかし、近年ダム完成によって、本流も水長沢近くまで水没し、私が入山した三十年前後(須田貝タム建設中)の須田貝から歩いたことを考えると、大巾に変革した。

奈良沢のモッコ渡しも、湯ノ花温泉も水没し、いまは湖底で徳ぶすべもなくなくなった。

泉の調査が実施されたこの機会に利根に関する調査資料の中から先駆者達を思い起してみたい。

(二)水源登山歴史
この地域に登山者が足を踏み入れた記録としては、明治二十七年の群馬県の探険隊と云うことにな

戦後二十九年になつて、群馬

ろつか。

この隊は、三十九名からなり、水長沢の文神沢ノ沢をつめて尾根に出、尾瀬沼に抜けている。

本流については、水長沢山から望み、見して確認したにすぎない。

この時、利根川図志とか江戸名所図会(徳川中期)などに出てくる利根川の水源は、文珠岩なる記述の確認を行なったのだが、その後

の調査ではいまだこれだと思つたのが見当らない。

その後は、大正九年の、木暮理太郎・藤島敏男氏による奈良沢の支流、幽の沢から小沢岳に登り、尾根をめぐって至山尾瀬の記録と、同十五年のやはり群馬県による本流遡行の記録がある。

正しくは、本流でなく深沢を登つたものであった。

昭和年代以前の記録としては、この三つものしかなく、木暮理太郎が、明治二十七年のコースと同じコースを辿つたとしている

推定では、明治三十年頃、誰かにつれられて行ったようである。昭和にはいつてからは、四年から戦争たけなわな十七年頃までは毎年数パーティーが、本流・奈良沢・水長沢・剣ヶ倉沢などに足を踏み入れたが、他の沢はほとんど踏まれることはなかつたようだ。

岳連に依る本流遡行が実施され、再び利根源流登攀の幕明けとなつたものである。

これと同時に、各加盟団体による支流の遡行が実施され、裏越後沢(前橋山岳会)水長沢(渋川岳会)想) 剣ヶ倉沢(沼田山岳会)小穂(口沢) 奈良沢(伊勢崎山岳会)などがトレースされた。

残念なことに、これらの記録は本流を含めてまとめられることなく埋もれてしまった。

その後、主な支流については、県内外の山岳会などによって、ほとんど登られてしまった。

(三)先駆者達
利根に於ける先駆者は、なんと云つても明治二十七年の、小西文之進・渡辺千吉郎氏であり、この人達は未知の冒険に備えて、鉄砲や刀を携帯したとのことであり命がけであったことが判る。

木暮理太郎は二度程の入山であったらうと思われる。

大正十五年の群馬隊は、安達成之氏らであり、この隊員の方で生存する方も多いのではないかと思

う。出来ればお逢いして話を聞か

せてもらいたいと願っている。昭和初期に入山した人達の中には、中村謙氏とか黒田正氏夫妻

・角田吉夫氏・川崎雄雄氏などの名前も見られる。

この時代に活躍した利根の名ガイド、林主税の名を落すことは出来ない。

木暮理太郎や大正十五年の探険隊にも同行し、その後、大町周一郎(砂盆義)・上田哲豊氏などのガイドをして本流を遡行するなど、昭和十三年頃まで活躍した記録が残されている。

登山家ではないが、探鉱師として、水長沢の銅鉱を発見した藤原の中島朝吉氏なども数多くの沢を歩いたようである。

昭和十年代には学校山岳部の水戸高校現茨城大学とか成蹊高校などの人達が盛んにはいり、日本登山会なども入山したようだ。

戦後は二十九年の岳連隊がキツカケとなったが、この隊長は現副会長の中島喜代志氏、副隊長、田

村朝之助(理事長(前橋)前出)小林三雄氏も隊員として参加している。

他には隊員として渋川岳会から三名参加し、協力隊の中には、朝朝吉、剣持勝美氏(土合のセンター)などの名前も見られる。

この報告は「山溪」百八十四号に発表されたが、この時の大島俊彦氏(当時観光課)による主要な場所のスケッチは、良くその特徴をとらえていて、いまだに貴重な資料として珍重されている。

四)研究を続けている人達
なんといつても、小林三雄氏(松井田)のキャリアは群を抜いている。

専門の地質学調査も有るだろうが、すでに三十年にならうとして、県外では千葉の野田博隆登山会の高会(鈴木茂徳氏の奥利根登攀クロナクルに見られる各種資料の収集では群を抜いている。

東京ゼフィリス山岳会の小泉氏もほとんどのトレースを終らうとしているようである。

羽野順一・塩島和之(境山の会)上原剛(松井田)中島三郎(奥利根山岳会)などは現在活躍中で成果が期待される。

次に団体であるが、岳連では松井田山岳会、ミヤマ山岳会・境野山の会などがあり、地元奥利根山岳会も熱心に行なっている。

雪標登山会などは、三十年代に活躍したが現在の状況は不明である

以外では、鈴木氏を中心とした探検登山会があげられる。

(五)あとがき

利根の水源は、文殊菩薩の乳頭よりしたたり落ちる水滴なりとした伝説にしても、調べてみると徳川中期の利根川図志などに見られるが、文化六年の上野名跡考にはのっていない。また安永十三年の上野国志にもないとか。

そして明治二十七年の探険隊は、溪間の一立山に文殊菩薩の跪座せあり、百二十年以前に見たる所の……とあることから推察すればすでに、その確認が行なわれていたことになる。

すると誰かということになるが、私の知識では捜す術もない。

利根に関する資料をお持ちの方はぜひご指示下さい。

はせひご指示下さい。

嶺呂のいわれ
嶺呂とは、万葉集の中に出てくる言葉で、嶺は、山々・峰々の意味で、呂は親愛・感動の念をこめて使う接尾語です。万葉集、上毛野国の歌の中に、「久呂保の嶺呂(赤城山)とか、「伊香保の嶺呂(榛名山)などという風に使われています。

久呂保の嶺呂は現在の赤城山のことで、クロホのクロは山頂付近の黒々とした針葉樹林が遠望されるところから、ホは高くそびえたつ様子を言う言葉です。伊香保の嶺呂のイカホは、いかつい高い山即ち国の中央に大きな山々がそびえたつている様子を表わしています。いずれも麓の人々が親愛をこめて呼んでいたようです。

久呂保の嶺呂は現在の赤城山のことで、クロホのクロは山頂付近の黒々とした針葉樹林が遠望されるところから、ホは高くそびえたつ様子を言う言葉です。伊香保の嶺呂のイカホは、いかつい高い山即ち国の中央に大きな山々がそびえたつている様子を表わしています。いずれも麓の人々が親愛をこめて呼んでいたようです。

スキー驚異の大処分
山とスキー専門・白緑グループ
ピーヨンスポーツ

高崎市檜物町 5 4 - 2
TEL 0273-26-3888

オリジナルギフト製造販売
贈答品・記念品・引出物
株式会社 丸興

御一報下されば伺います

高崎市上中居町 1 3 8 2
TEL 0273-52-0970(代)

東芝電気より感謝の礼状

昨年八月、南面タカノスB沢にて亡くなられた 東芝勤務の、桜井 守さんら二名の遺捜及び遺体取用に関して、岳連に対し次の様な礼状を戴きました。

群馬県山岳連盟

会長 浜名 一雄 殿

東芝総合研究所長 蛭 崎 賢 治

拝啓 初秋の候ますます清涼のことと拝察いたします。さて、このたび弊所従業員 桜井 守の遺難事故に際しましては、貴長はじめ貴岳連各位の並々なお力添えを賜わり、誠に有難く心から厚くお礼申しあげます。

貴岳連におかれましては、事故発生の際、直ちに悪天候下にも拘りませず、何かとお忙しい中を甚だ危険多い遺難現場に二次に亘り、救援隊を派遣いただき、遺難者本人が遺体となって発見されましてからは、会員各位のご疲労の程、如何ばかりかと存じますに、直ちに遺体取容にご着手いただき誠に迅速円滑にご処置いただけましたことは弊職はじめ所員一同深く感謝いたしているところでございます。(中略)

なお、今回大変お世話になりました貴岳連に謝意を表すとともに今後ますますご発展、斯界にご貢献されますことを祈念いたしまして敬意を表したく存じますので、ご笑納下さいますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、貴長はじめ会員皆様様のご健勝を心から祈念いたしますとともに貴長からご関係の皆様と呉々もよろしくご風声賜わりますようお願い申し上げます。

先ずは書中にてお礼申しあげます。

敬具



救助隊訓練

救助隊秋季救助訓練

十月二四日標名山黒岩で

小雨が降ったり止んだりの天気の中を、隊員二十一人が参加して行われた。

今回の訓練は、谷川岳一ノ倉沢 衡立岩での遺難を想定した本番さながらの救助訓練で、約五十七人張り出したオーバールンクに遭難者(隊員だが)が吊り上がりとなった。この遭難者の上と下に、長さ百メートル、直径四・八ミリ、切

断荷重一、九トンの鋼鉄ワイヤーロープを張り、上から救助者が張られたワイヤーに取り付けた滑車と、救助者下降用ザイル、別の確保用ワイヤーを装着し、上からのアイスクレーキ操作により遭難者のいる地点まで下降する。そして滑車に遭難者を固定し、確保用ワイヤーを取り付け、遭難者が結んでいるザイルをナイフで切断した後、下降用ザイルで下降する。さらに、張つてあるワイヤーを強く張つて上からの確保用ワイヤーの繰り出しによりケーブルカーのように遭難者を地上に降ろす。これを張り込み方式という。それから、遭難上部に滑車を固定し、遭難者を背負った救助者の二人を、下でのウインチ操作により引き上げたり引き降したりするウインチ方式の二つの救助方法を訓練した。

休憩時間に隊員達は、汗をふきながら、ときおり霧の切れ間から見える周囲の山々の紅葉を眺めて緊張感を解していた。(女屋等志)

実技講習会

本年度の日山協補助事業による

一般登山者対象の登山実技講習会は、吾妻郡岩櫃山(いわびつやま)を会場として、十一月二〇・二一日の二泊二日で行われました。

この事業は、日山協が主催する一般登山者に対する安全で楽しい登山の啓蒙及び正しい登山の普及活動を受けて行なわれたもので、日本船舶振興会からの補助を受けています。講師は田中成幸氏以下一七名の日山協指導員があたり、一名の講師と五十名の受講生が同じテントで泊り、共に行動しながら、交流を深め、経験を豊かにしていくという趣旨で行なわれました。

第一日目は、中之条高校に集合し、同農場でのテント生活の実践講師とのミーティング、さらに夜はキャンプファイアーを囲んでの一時を過ごしました。

翌二日は晴天にめぐまれ、各パーティ毎に自ら地図にとらめながら、各自のコースを岩櫃山へと向い、さらに郷原駅へと下山し、閉会となりました。

各講師は自分の体験を語り、自分の経験や技術をそれぞれの考え方で受講生に授け、概ね、好評のうちには終了しました。昨年はストの赤城山に次いで、第二回の講習



会になったわけです。この小さな試みが、大きな波紋となって、趣旨が十分生かされるように拡がっていくことを期待します。

参加した講師は次の人たちです

石井謙一郎・布施正昭・田中成幸・太田忠行・原田悠司・中原正喜・樋口宗平・堀口貞夫・堀江登志夫・高田政美・大沢清・大谷清高橋啓太郎・悴田正也・村上泰賢石川忍・生田三郎・柴田義孝・宇田川邦司・下平正弘・山田完治

講演と映画の夕べ

去る十一月二十四日、群馬会館に於いて、北極圏二万二千里を走破した植村直己氏と、ジャヌー北壁登頂を果たした小西政経氏を招いて講演と映画の会が催された。これは海外登山研究会の主催によるもので両氏の顔を合わせた講演会も初めてとあって会場は満員となった。映画はすでにテレビで放映されたものであったが講演の中で両氏の冒険に対する考え方や体験談など身近に聞くことが出来た。このような催しを毎年続けて欲しいという声も多かった。

宇部明氏 K2 遠征隊に参加

鷲羽上越支部会員、宇部明氏が日山協の K2 遠征隊員候補として理事会で推薦されました。

この遠征隊は、今年四月に出発し、カラコルムにある、世界第二の高峰 K2 (八六〇一米) にアタックするもので、全国の岳連から公募し、また推薦された約四十名とでも、関係者に充分な説明の出

尚総指揮は吉沢一郎氏、隊長は新貝勲氏があたります。成功を祈りましょ。

オリエンテーリング講習会

第二回の標記講習会は十一月九日、二〇名の受講生を得て、体協会館で悴田正也氏を講師に座学が行なわれ、読図の基礎、コンパスの初歩技術、オリエンテーリングのやり方などを学びました。実習は、翌週十四日(日)に、前橋北郊の橋山周辺で行なわれ(前橋オリエンテーリング大会に合流)朝からの、土砂降りのため、岳連関係参加者は九名とちよつときびしい状況でしたが、岳連関係の成績は次の通りでした。

男子青年一位茂木太太郎(登高会) 二位真下富夫(〃)

通算で両名は男子で五・六位と頑張りました。他の参加者は残念ながら、時間オーバーやペナルティで失格となりました。

冬山合宿検討会

例年実施されている、冬山合宿検討会が、昨年末の十二月十三日夜、体協会館に於いて行なわれた。今年の合宿計画を持つ団体十八

計画山行二十一グループが、アルプスを中心に入山することになり、昨年度の情報交換と最新情報についての分析、遭難防止に対する対策事項が協議された。

毎年問題とされる計画書の形式について、年々良くなってきているが、自分達では判りきつていない、努力致す所存です。(川辺柳一)

有能な、太田氏の後を受けての仕事だけに、何かと比較されることもあろうと思うが、この点は、悴田氏を始めとする優秀なスタッフの協力で、おこなってもらってもいいです。

幸いにも、今後共、太田氏の協力が得られることになったのは心強いからである。

会報も、限られた紙面に何もかもは云えず、無理な点もあるの

来る内容のものでなければならぬと思う。

各会の成功と無事で行って来られるよう安全登山に心がけよう。

編集後記

師走も半ば、なんだかんだと何んかがあり、忘年会もスリ抜けて大して役にも立たないが編集に一生命である。預つた原稿は貴重なので、活字になるまでは責任がある。ふと時計を見ればもう十一時を過ぎていた。でも、もうすぐ帰れそうである。(高田政美)

行きがかりとは恐いもので、能力に関係なく大変な仕事を押しつけられてしまうことが間々あるものだ。

これは受ける側の意志の問題にも関係することもあるが、私の編集責任者などは、その最たるものである。

川辺柳一